

1.（1）第8学年における研究主題に基づく実践

協働的な対話を通して、新たな考えを構築する授業 ー異文化・コミュニケーションに対する見方・考え方を広げるー

英語科 兼井 智加



1 学びの構想

新年度になってすぐ、福井大学教職大学院から嬉しいお話をいただいた。それは、5月8日から1ヶ月間、シンガポール人の国際インターンシップ生を受け入れてほしいという趣旨だった。名前はJoy Liu Tongruiさん。シンガポール南洋理工大学国立教育学院の大学生で教育学と中国文学を専攻しているという。本校は福井大学の教育実践の場として、毎年、多くの留学生が授業参観や教育実習に訪れていたが、新型コロナウイルス感染症の広まりにより、ここ数年はストップしていた。4年ぶりに留学生がやってくる。久しぶりに大学の「附属」らしい風を感じた私は、本年度の研究副題「共に学ぶプロセスをデザインする」が頭に浮かび、子供と共に、そして、留学生と共に学ぶプロセスをどうデザインできるのか、胸が高鳴った。

国際交流担当として、様々な学年・教科との交流を計画しつつ、英語科では8年生の授業に多く関わってもらおうということになった。というのも、8年生の教科書には“A Trip to Singapore”というシンガポールの言語や文化を題材にした単元があり、実践のタイミングが彼女の実習期間ともピッタリ重なっていたからだ。普段なら、教科書の本文に加え、写真や動画を駆使しながら子供たちの興味・関心が高まっていくように単元をデ

ザインするが、本実践では、外国人留学生とのコミュニケーションが学びの価値を繰り上げると思った。英語科の本質的な学び「英語を用いて『他』とかかわり、世界観を広げる」にもあるように、子供たちが、シンガポールという国の魅力に触れながら、異文化に対する寛容性を捉え、自身の価値観を広げる単元にしたいという思いを持って本単元に入った。

2 学びのストーリー

（1）シンガポールの魅力とは（第1～2時）

ゴールデンウィーク明けの英語の授業。子供たちにシンガポールから1ヶ月間、留学生が来ることを伝えようと、ざわめきの中にわくわく感が漂った。早速、話題はシンガポールに。“What do you know about Singapore?”という問いに、子供たちは「マーライオン!」「マリーナベイサンズ!」と勢いよく答えた。車好きの洋平からは、「シンガポールには車の自販機があります!」とマニアックな情報が共有された。教科書を開くと、まさに子供たちがつぶやいたマーライオンやマリーナベイサンズの写真が載っていた。さらに、ページをめくると次のようなコラムがあった。

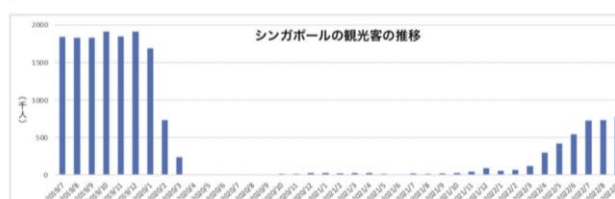
シンガポールは東南アジアにある多民族国家です。面積は約720平方キロメートルと小さいながら、その中に中国系、マ

レー系、インド系などの民族が共に暮らし、多彩な文化を形成しています。言語についても、英語、中国語、マレー語、タミル語を公用語と定めています。

シンガポールにはマライオンなど多くの観光スポットがあり、アジアを代表する旅行先として人気があります。

資料1 教科書のコラム

「え〜、そんなに人が来てるんか？日本の方が来てるやろう！」とすぐに光博がつぶやいた。そこで、比較ができるようにと用意していたシンガポールにおける2022年度の外国人観光客数のグラフ（資料1）を見せると、子供たちからは「日本少ない！」という驚きの反応が返ってきた。コロナ禍においてはシンガポールの外国人観光客数が日本の外国人観光客数を大きく上回っており、子供たちの中では、自然と「なぜ？」という問いが生まれていった。シンガポールは、日本に比べて外国人観光客に対する規制緩和が進んでいることは確かであったが、世界に目を向ければそのような国はたくさんある。それ以外に何か魅力があるのではないのか？“Why do many foreigners visit Singapore?”という本単元の探究課題が共有された。



資料2 シンガポールの外国人観光客の推移

まずは、課題に対する予想を英語で書いてみることにした。裕は「みんなが、なんとなく、聞いたことのある場所だから」と日本語で記した。裕は、隣で勢いよくタブレット端末で調べ始めた由美の姿を見て、「俺も調べよう！」と検索し始めた。また、授業後の振り返りには、「シンガポール限定であるよい部分とは？」という問いが書き残されていた。

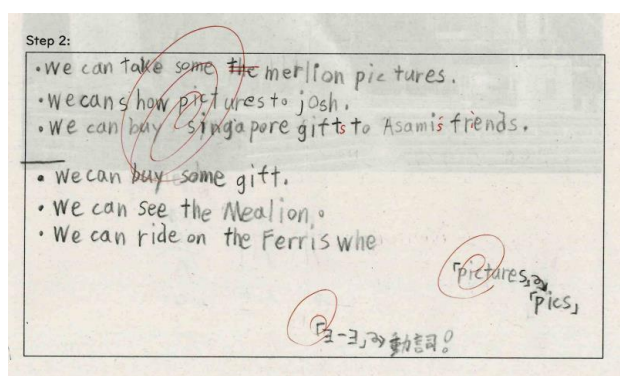
翌日、子供たちは自分が予想した（調べた）外国人にとってのシンガポールの魅力をグループで共有した。“We can eat delicious food.”や There are many tourist attractions.”という予想の他に、diversity「多様性」や Multi-cultural society

「多文化社会」というシンガポールを色濃く表すような英単語が共有された班もあった。全体共有の際、裕は、聞き慣れない単語に「ダイバーシティ」とつぶやきながら、ワークシートの欄外に熱心にメモを取っていた。

“To get some information about Singapore, our textbook is good. Let's read it.” ALTのNicholas（通称Nick）の呼びかけにより、子供たちは教科書を開いた。教科書のストーリーでは主人公の朝美がシンガポールの観光地を巡り、動画やメールで情報を伝えている場面が描かれている。子供たちは、教科書本文の概要をつかみ、“What can we do in Singapore?”というNickからの質問に備えてメモを取っていった。以下は、教室を回っていたときの裕との会話である。

裕： We can take some Merlion Pictures. We can show pictures ... これshowで合ってます？
 教師： う〜ん、We can see じゃなくて？
 裕： Joshに撮った写真を「見せる」って言いたいんです。
 教師： ああ！ それなら“show”だ！

Joshとは、教科書に出てくる朝美の友人であり、裕は“Asami can show the pictures to Josh.”ということ伝えようとしていた。他にも“We (Asami) can buy Singapore gift(s) to Asami's friends.”という文も書いてあった。



資料3 裕のワークシート

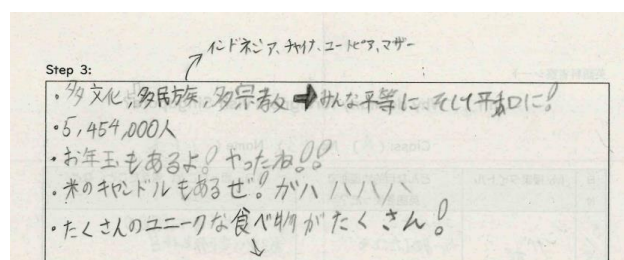
裕の英文からは、彼の想像力と友人を思う気持ちを感じ取り、温かな気持ちになった。そこで、裕が書いた文を他の子供たちにも紹介すると、英文から垣間見える彼の優しさに笑顔を浮かべた。由

美も「クラスメイトの意見」として自らワークシートに書き足した。由美の振り返りには「自分で本文をしっかり読んで、考えを深くしていくことで、より理解度がUPする！」とあった。

（２）留学生と意見交換しよう！（第3～5時）

いよいよ、シンガポール人留学生の Joy がやって来る日となった。しかし、それだけではない。教職大学院からメキシコ人の Ana（小学校教諭）、グアテマラ人の Kandy（幼稚園教諭）、ミャンマー人の Sander（高校教諭）、アメリカ人の William（大学教員）にも参加してもらえることになり、Nick を含め全部で6名の外国人が教室に集うという何とも贅沢な授業環境が実現した。

「みなさん、こんにちは。私の名前は Joy です。シンガポールから来ました。よろしくお願いします。」子供たちは彼女の流暢な日本語に驚いた。留学生の Joy は「直接シンガポールの話を聞いてみたい」という子供たちのリクエストに応えるために、早速シンガポールに関するプレゼンテーションを始めた。プレゼンテーションでは、子供たちが多くの外国人観光客をひきつけるシンガポールの魅力だと予想していた食べ物や観光地などの具体が異国情緒あふれる写真と共に紹介され、さらには、民族や宗教、それに関連する伝統的な衣装や祭礼、その他、住宅事情に至るまで盛りだくさんの内容だった。子供たちは速く聞き取りづらい英語に苦戦していたが、diversity「多様性」や Multi-cultural society「多文化社会」という前時における言葉の学びが理解を助け、彼女のにこやかで親しみやすいパーソナリティがその場の雰囲気や和らげていた。



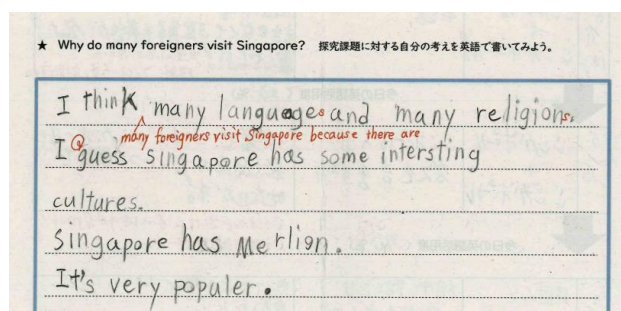
資料4 聞き取った情報に自身の感想を付け足している裕

Joy のプレゼンテーションが終わると、その時

間の後半は6人班になり、各グループに一人ずつ外国人のゲストティーチャーが入った。リラックスした空気感の中で交わされる日常会話と子供たちの笑顔。このような光景を見ながら、これぞ、普通の英語の授業であるべき姿なのではないだろうかという思いに浸っていた。由美の授業後の振り返りには、「今日は外国の人と交流して、いつもない経験ができてよかったです。これからいろんな場で交流したい！！」と綴られていた。一方、裕はというと、教師側の見取りとは異なる感情を抱いていた。「正直、何も話せなくて、理解も難しかった！くやしい！」

翌日の授業、裕の思いを知れたこともあり、全体で Joy のプレゼンテーションの内容を確認することから始めた。子供たちが何を語るかで、どのようなことに興味を持ったのかがわかる。「旧正月には“Red Pocket”というお年玉をもらえる文化があるって。でも、200円ぐらいって言ってたなあ。」裕も自分が得た情報を積極的に仲間と共有した。

シンガポールの魅力を予想し、教科書やオンラインで情報を手に入れ、シンガポール人の Joy から話を聞いたところで、一度、探究課題に対する自身の考えを英語で書いてみることに挑戦した。書き始める前には、自分の考えを伝えるための英語表現として I think (that) … の他にも、推測の表現として I guess (that) … や、確信の表現として I'm sure (that) … も使えることを教えた。以下は、裕が書いた英作文である。



資料5 裕が書いた探究課題に対する考え

裕は、外国人観光客がシンガポールを訪れる理

由として、言語や宗教や文化の多様性を挙げており、最初の予想時にはなかった新たな考えが生まれていた。また、授業後の振り返りに「授業で、ここまでシンガポールで楽しめたので、いつか行ってみたいかも。」と異国への興味関心が高まる様子が綴られていた。

翌週、Joyをはじめとするゲストティーチャーたちが再び授業に参加してくれた。この日は、グアテマラ人の Kandy に代わりに、教育学部のアメリカ人留学生 Abigale (通称 Abi) が新たに加わった。子供たちは、Nick のファシリテートによって Abi の好きな食べ物や出身地に関する話を聞いたあと、同じメンバーで6人班をつくり、先週とは異なるゲストティーチャーと交流した。

裕のグループには Abi が入り、年齢当てを楽しんだあと、次は子供たちが自分自身のことについて話をした。放課後は絵を描いているという子は、Abi に人物か風景かどんな絵を描いているのか質問され、自分の描いている絵を見せていた。部活動をしているという子は、何の部活をしているのか、週何回程度の練習をしているのか、練習はつらいかなどの質問によって、会話がつながっていた。裕も自分の伝えたいことが伝わったときには本当に嬉しそうな表情を浮かべていた。

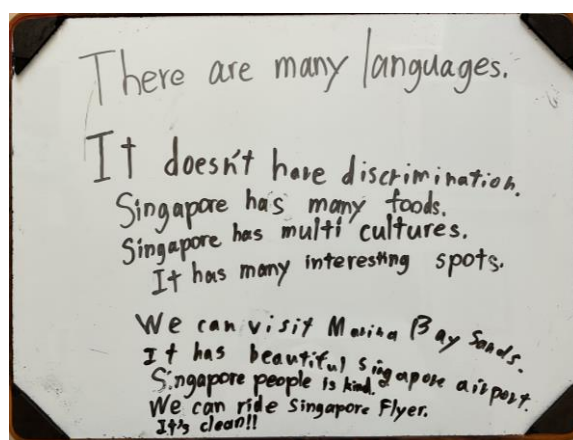
Abi : What do you like to do after school?
 裕 : Watching YouTube every day.
 Abi : What about homework?
 裕 : No. (笑)
 Abi : Do you do the same thing every day?
 裕 : Hit ball.
 Abi : Volleyball?
 裕 : No...
 Abi : Dodgeball?
 裕 : Yes!!
 Abi : I used to play it every day.
 裕 : つながったよ、心!



資料6 グループでの会話の様子

13分程の会話のあと、ゲストティーチャーたちが席を移動した。次に裕のグループにやって来たのはメキシコ人の Ana だった。子供たちは、新たなゲストティーチャーを迎えたところで、本単元の探究課題 “Why do many foreigners visit Singapore?” について順番に意見交換をした。

太一 : There are many languages.
 Ana : Good. You can write it (on the white board).
 光博 : It doesn't have discrimination.
 裕 : Singapore has interesting cultures.
 由美 : Singapore has interesting foods.
 実 : It's multicultural.
 裕 : Multicultural?
 由美 : 多文化という意味。
 裕 : Oh, OK.
 Ana : Singapore Airport. I like to visit the beautiful airport. How about you?
 奈々子 : Singapore people are kind.
 光博 : Singapore Ferris Wheel!
 Ana : ?
 光博 : あったよね?
 Ana : Flyer?
 光博 : Flyer! Flyer!



資料7 グループでの意見交換をまとめたホワイトボード

子供たちは、これまでの学びを総動員させて、時折、グループで確認し合いながら、ゲストティーチャーとの意見交換に励んだ。授業後、裕は「思っていたよりも現実的に難しいところもあったけれど、楽しみ!! (言えるのがたのしい? みたいなの)」と振り返っており、外国の人たちと英語で会話する経験を重ねることによって、コミュニケーションに対する彼の考え方も大きく変容していることがわかった。

（４） シンガポール・スタディツアーを提案しよう！（第6～12時）

“Look. Do you know what picture this is?”

20名程の子供たちがマーライオンの前で記念撮影している写真。「あ！知っている人がいる！」と光博が声を挙げると、兄姉がいる子供たちを中心に、その写真が、以前、本校で実施されていたシンガポール研修のときに撮られたものであることに気づき始めた。ALTのNickも興味津々だった。

本校では新型コロナウイルスが広がる以前、夏季休業期間を利用して5日間の海外（シンガポール）研修を実施していた。この日は、4年前に参加した先輩たちが帰国後の報告会用に作ったスライドを使って、シンガポール研修の中身について紹介した。1日目は午前5時に集合し、中部国際空港からシンガポールのチャンギ国際空港へ。夕方に到着後、夕食を食べて、午後8時にマーライオンを見に行った。子供たちからは、「夜景を見に行ったのか。」と興味深そうな声が上がった。2日目の午前中はシンガポール国立大学の附属高校に訪問し、午後は観光を楽しんでいた。チャイナ・タウンやガーデンズ・バイ・ザ・ベイの写真も挟まれており、子供たちは周りの友達と話をしたくて仕方ない様子だった。しかし、3日目の正午にある情報に気づいた哲也がつぶやいた。「ホームステイって書いてあるよ！」子供たちの視線が再びスライドに集中した。3、4人のシンガポール人らしき人たちに囲まれた先輩の写真が映し出されると、「先生、ホームステイって一人で行ったんですか？」と質問があった。それに対し、“Yes. I heard they stayed with different families.”と答えると、子供たちからは驚きや不安の声が上がった。来年の夏に参加してみたいかと聞くと、子供たちの反応は様々だったが、興味はある様子だった。

“If we have Singapore Study Tour next summer, what do you want to experience / learn?”という2つ目の探究課題が提示されると、Nickからも“Local / Unique / Special”という3つのキーワードが共有された。

子供たちはタブレット端末を取り出し、調べ学習を始めた。ホームページやGoogle Earthで具体を調べる姿はどこか楽しそうで、「見て見て！」と周りの友達に共感を求める姿があちらこちらで見られた。そんな中、裕は何もしていない様子だったので、気になって近づいてみた。すると、メモのアプリケーションが開かれており、「1. 英語力、コミュ力 2. 未知への食べ物、素晴らしい景色」と書き込んでいた。裕は、探究課題に対してまずは自分の考えをもつことから始めていたのだ。残り10分。その日は、子供たちが調べた具体的な情報をもとに、“What do you want to experience / learn?”という問いについて、ペアで意見交換し、自分が特に経験したいことや学びたいことをワークシートにメモをして終えた。

次の時間からは、グループに分かれ、プレゼンテーションの準備に入った。グループは、前時に書いたメモをもとに1グループ3～5人で組み、プレゼンに使うスライドについては、先輩が作成したものをひな形にグループで作成することにした。最終的には外国人のゲストティーチャーたちにプレゼンテーションをすることも伝わった。裕は男子5人から成る「Life Style」のグループに入った。しかし、この日、グループ内の会話は少なく、各々の興味関心に沿ってタブレット端末で調べていた。

次の日になると、ツアーの日程が決まるなど、動きが出始めたグループがある一方で、裕たちのグループ活動は停滞していた。裕はというと、ツアーの中身よりもスライドデザインに没頭していた。途中、グループ内から「Life Styleって何？」という素朴な疑問が聞こえたが、話は深まっていかなかった。

残り10分少々、英語をまったく使わず、タブレット端末で調べているだけの状況はよくないと判断し、できているところまでの内容を英語で共有することを促した。ところが、子供にとって、教師の「できているところまででいいよ」という言葉は受け入れがたく、共有の方法も英語での伝え方も理解していない子供たちは、苦痛な表情を浮か

べた。その様子を受け、教師の筋で強引に授業を進めてしまったことに対して申し訳なかったという気持ちを伝えると共に、プレゼンのゴールは何かということをもう一度、確認した。また、Nickが困惑した子供たちの様子から機転を利かせて英語での伝え方を板書してくれていたため、それらを全員でリピートして終えることができた。

翌日、裕たちのグループでは、知らない間に自分が担当する日を決めており、グループ内でも会話が弾むようになっていった。

快人：ホームステイしたい人？

勇気：「スタディ・ツアー」っていうんだから、最後までどこか巡った方がいいよ。

快人：USS（ユニバーサル・スタジオ・シンガポール）は？

勇気：先生も言っていたけど、他の班はここでしかできないことをしているって！

優： ライフスタイルらしきことって何かしたっけ？

伸介：ライフスタイル7箇条。これだって。

斗真：Day 5は帰るだけだよな？

裕： 空港とかで何か遊べないかな？

斗真：空港に映画館！あと、ポケモンセンター・シンガポールがあるらしいよ！

裕はシンガポールに到着した初日を担当しており、マーライオンの夜景を見る時間を確保しようと移動中にお弁当を食べる行程を立てていた。

残り10分となり、前時と同じ方法で共有する時間を設けた。裕は同じグループの勇気に時刻の伝え方を教えてもらいながら英語で伝えようとしたが、苦戦していた。裕の姿を見ながら、探究的な授業デザインの中で、どのように英語でのコミュニケーション力を高めていけばよいのかという教科としての目標の壁が高く立ちはだかっていることを痛感した。

何とか子供たちの視点を、内容面から言語面に向けたいと思った私は、ALTのNickの力を借りることにした。Nickは、子供たちが本番のプレゼンテーションを終えたあと、私に厳しい評価を伝えた。Delivery（伝え方）に関する課題は当然ながら、限られた時間の中でどこを一番伝えたいのかComposition（構成）に関する工夫が必要だったと話した。私は思い切って、彼の評価を子供たち

にそのまま伝えてほしいと頼んだ。

翌日、子供たちはNickから厳しい評価を聞き、沈んだ表情を見せた。子供たちのスキルアップのために、正直な評価を伝えてほしいと頼んだのは私であったのにも関わらず、いざ、子供たちを前にすると、これでよかったのかという不安が襲ってきた。そして、教師として、子供たちにどのような力をつけることがねらいであったのか、その部分が曖昧であったのかもしれないと反省した。しかし、省察シートには、次の単元でもう一度挑戦したいというような前向きな思いを綴っている子供が予想以上に多かった。私もその言葉を受け、次は子供たちが自分自身の成長を実感できるような単元デザインにしたいと強く思った。

3 省察

（1）共に学ぶプロセスをデザインするとは

本実践では、裕を中心とした子供たちの様子から、研究副題「共に学ぶプロセスをデザインする」とはどういうことなのか、また、そのプロセスの中で、どのような資質能力が培われつつあるのかということを考えてきた。単元を終え、今、少しずつ見えてきているものを記す。

① テーマや題材に対する価値観の広がり・深まり

“Why do many foreigners visit Singapore?”という主題が共有されたときの裕の考え（予想）は、「みんなが、なんとなく、聞いたことのある場所だから」であり、グループで共有しても、子供たちの背景知識を表したシンガポールの表面的な部分のみがホワイトボードに並んでいた。（日本語で書かれていた裕の考えを、グループのメンバーが英語で表現してくれたことはよかった！）

しかし、そこから、教科書を読み、シンガポール人留学生のプレゼンテーションを聞き、クラスの仲間や外国人のゲストティーチャーたちと話すプロセスを経て、様々な言語や文化が共存するシンガポールならではの状況に価値を見出すようになっていった。このような変化は、周りの子供たち

の中でも互いに起こっていることであり、それら価値観の共有が、子供たち一人一人の考えをさらに広げたり、深めたりしていった。「共に学ぶプロセスをデザインする」とは、様々な人とのコミュニケーションを通して、新たな考えを構築する過程ともいえるのだろう。共に学ぶプロセスの中で、裕がシンガポールに「いつか行ってみたい」という思いを持ってくれたことも、その言葉の重みを感じ、とても嬉しかった。

② コミュニケーションに対する見方・考え方の変容

そのような裕の姿から、もう一つ大切にしたいと思えることが見えてきた。それは、子供たち自身の中で起こるコミュニケーションに対する見方・考え方の変容である。学びのストーリーで伝わったかと思うが、裕の英語力はそれほど高くはない。明るい性格ではあるが、英語に対する苦手意識が垣間見える。学級には、英語力は高くても、人とコミュニケーションを図ることが苦手で、活動に参加できない子供もいる。しかし、子供たちは、本単位を通して、多くの外国人留学生と対面し、普段以上に英語を使ってコミュニケーションを図る機会を多くもった。最初は「正直、何も話せなくて、理解も難しかった！くやしい！」と思っていた裕が、「思っていたよりも現実的に難しいところもあったけれど、楽しみ！！（言えるのがたのしい？みたいな）」という考えにまで至ったのはなぜだろうか。その大きな転機となったのは、「つながったよ、心！」という言葉に凝縮されたまさにあの場面だったように思う。苦手な英語でも伝えることを諦めない裕本人の粘り強さと、英語でどのように伝えればよいか、一緒に悩み考えてくれる仲間の存在の両方があってこそ、彼のコミュニケーションに対する見方・考え方が変容したのだろう。改めて、本校の研究主題「自律的な学びへのイノベーション」と「探究するコミュニティを培う」は相互に補完し合う関係であることを実感した。

③ 国を超えた教師の協働

本単位においては、外国人留学生の存在が重要であったことは言うまでもない。まずもって、彼女たちは子供たちの話に真剣に耳を傾け、同じ立場で課題について探究していこうとする姿勢が素晴らしかった。彼女たちのこれまでの経験や自身の価値観に基づいて子供たちと交わすオーセンティックな会話は、彼女たちが外国人であるということ以上に、子供たちのコミュニケーションへの意欲を掻き立てるものであったに違いない。子供たちの思いや考えを引き出そうとするファシリテーションのしかたや、子供たちに迫るタイミング・伝え方も含め、彼女たちの子供たちへの向き合い方が私自身にとって大きな学びになった。

また、本実践においては、ALTのNickや留学生のJoyたちと共に授業デザインを検討する機会をたくさん設けた。例えば、このあとも2つ目の探究サイクルを回そうと、単元を始める前から2つの活動案を持っていた。プランAは、シンガポールの外国人観光客に焦点を当ててきた子供たちが、次は日本の外国人観光客に目を向け、再び外国人のゲストティーチャーたちと対話を重ねながら、自分たちが未だ気付いてない日本の魅力を発信していく活動であった。ことさら、福井県を訪れる外国人観光客は47都道府県の中でワースト1という数字も出ており、福井県に絞って、外国人観光客に向けたプレゼンテーションを作るのはどうかと考えていた。一方、プランBは、ここまでシンガポールの魅力を探究してきた子供たちだからこそ、もし、自分が現地を訪れるとしたら、どこで何を体験したいか（学んでみたいか）と考え、シンガポール・スタディツアーを提案する活動であった。本校では新型コロナウイルスが広がる以前、夏季休業期間を利用して5日間の海外（シンガポール）研修を実施していたという経緯も合わせて伝えた。ALTや留学生たちからは、シンガポールを題材に、言語や文化の多様性にまで価値観を広げられた子供たちだからこそ、プ

ランBの方がよいのではないかという声が挙がり、最後は授業者である私の考えも合わせ、プランBで次のサイクルを回すことになったという経緯があった。子供たちのプレゼンテーションの内容を省察すると、多くのグループがシンガポールの特徴である言語や文化の多様性と関連性をもつような場所や体験をツアーに組み込んでおり、1つ目の探究サイクルでの学びや価値観の変容を表出していることに気づくことができた。同じ子供たちの学びに伴走している教師同士だからこそ、子供の姿をもとに授業デザインについて話し合えるのである。つまり、研究副題「共に学ぶプロセスをデザインする」とは、教師同士が互いに語り合い、学び合う側面があり、そこで培われる我々の協働性が子供の資質能力を高めるために非常に有効であると言える。本校が長い時間をかけて大切にしてきた学びを海外の同僚とも共有することができていることに喜びを感じる実践となった。

ような授業デザインを構想したい。

④「本質的な学び」の再考

英語科では「英語を用いて『他』とのかかわりを深め、世界観を広げる」を本質的な学びとし、これまでも教科書単元にある題材（コンテンツ）に関連する問いを英語でのコミュニケーションによって深めていくことが英語科における協働探究だと捉え、授業をデザインしてきた。しかし、本実践を振り返ってみると、英語でのコミュニケーションをうまくファシリテートしてくれる留学生がいた1つ目の探究活動に比べ、2つ目の探究活動では、プレゼンテーションまでの過程において、子供たちの英語の使用状況に大きな差が見られた。母国語での題材に関する深い理解や、見方・考え方を獲得することは、コミュニケーションの質を高めるプロセスには重要であるが、英語科の本質的な学びの中心は、英語を用いて、どのように『他』とのかかわるか、つまり、どのようにしてコミュニケーションの場を協働で創っていくかということであろう。次の実践では、この点を意識し、子供たちの学びがコンテンツからコンピテンシーに向かう